教職大学院 Newsletter No. 6 β

福井大学大学院　教育学研究科　教職開発専攻　2008.10.30

実践と実践を結ぶ 新しい回路

この夏，福井大学で教職員免許更新制の試行のための講習が行われました。様々な議論を経て制度化されたこの講習ですが，この制度を，教員養成を担う，しかも今後の教師教育の在り方を切り開くために教職大学院を創設した学部・研究科として，どのように受け止め，責任を担っていくべきなのか，学内で議論を重ねてきました。「福井大学で行う講習では，教職大学院で中心に据えている実践の省察・展望を大切にしたい」「教職大学院で進めてきているように，世代を超え，教科や校種を超えたメンバーが，互いの実践にじっくり耳を傾け，考え合うセッションを組み込んだものにできないか」「福井で積み重ねられている先生方の実践が表現され，共有され，記録化され互いの財産として蓄積されていくような機会にできたらいいのだが」。そうしたことを，多くの先生が参加する講習の中で実現していくにはどうすればいいのか。県教育委員会や市町教育委員会をはじめ，多くの先生方の御意見を伺いながら，試行の準備が進められました。福井大学の客員教授，附属学校・公立学校の管理職，さらには，退職校長の参画も得て，少人数でじっくり実践を語り合うことを中心に据えた講習を実現することができました。

この講習の中で，様々な学校での実践記録を読み合い，検討する時間を取りました。数多くの記録の中から自分で選択して読み深めていくのですが，教職大学院の拠点校の実践記録を選択される先生も少なくありませんでした。拠点校で編まれた，長い実践の歩みを語る記録を多くの先生にじっくり読み解いていただく機会ともなりました。これらの記録は，受講した先生たちが自分自身の実践を書き表すときにも手懸かりとなります。60 人近くの受講者の実践記録は 400 頁を超える報告書になりました。

教職大学院と拠点校で展開される実践と研究が，県内のほとんどすべての先生たちが 10 年に一度参加する更新制の講習の中で，じっくり吟味検討される。そしてそこでの検討が，それぞれの次の実践に生かされる。教職大学院・拠点校の実践とより多くの先生の実践を結ぶもう一つの回路が開かれつつあることを実感しています。

秋に入って，教職大学院の第 1 年目の後期授業が始まっています。各学校での公開授業研究会も続きます。この大切な最初の年の実践と研究の歩みを著す「長期実践報告」についての相談も始まっています。夏の間休んでいたニュースレターも，学校での着実な展開に負けないように，編集発行していきたいと思います。（柳澤昌一）

Make it Public
Critique it
Pass it on
Built upon it
Ann Lieberman, 2005.03

内容

実践と実践を結ぶ　新しい回路 (1)
インターンシップ　専門職大学院ＧＰに採択 (2)
2008 年夏の展開 (4)
教員免許状更新制講習の試行 (5)
実践研究/交流報告 (8)
　サンディエゴ・東京・ストックホルム
拠点校の公開授業研究会 (11)

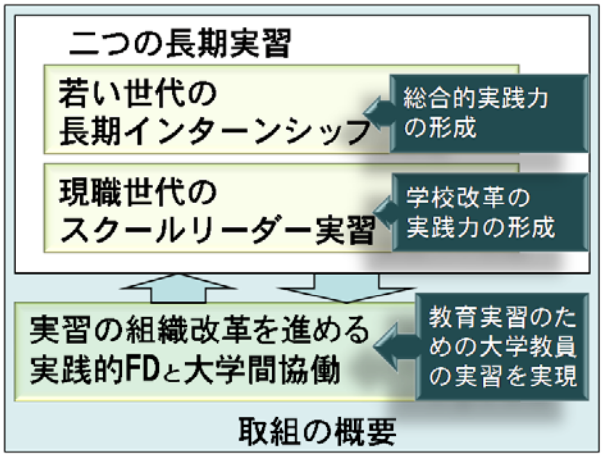
福井大学教職大学院のインターンシップの取組
専門職大学院「グッド・プラクティス」（GP）に採択される

大学における教育の質を高めるための取組として，「グッド・プラクティス」（以下，GP と略します。）という取組が進められています。文部科学省が，これからの時代の大学教育の課題に取り組む実践を全国の大学から募り，委員会による審議選定を経て選抜された取組について，その支援のための予算を配分するものです。福井大学教育地域科学部・大学院教育学研究科では，これまでライフパートナーと探求ネットワークを中心とする取組（2003-2006），教職大学院の前進である大学院学校改革実践研究コースの取組（2005-2006）が GP に採択されてきました。今回，専門職大学院の GP※に教職大学院のインターンシップの取組が採択されました。教職大学で今回採択された取組は，東京学芸大学・愛知教育大学・奈良教育大学・兵庫教育大学，そして福井大学をそれぞれ中心とする取組の５つです。以下，福井大学が中心となり，金沢・富山・群馬の各大学と協力して進める取組の概要の部分を抜粋します。

（※正式の名称は以下のとおりです。平成 20 年度「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」）

実践力・改革力を培う長期協働実習の組織化

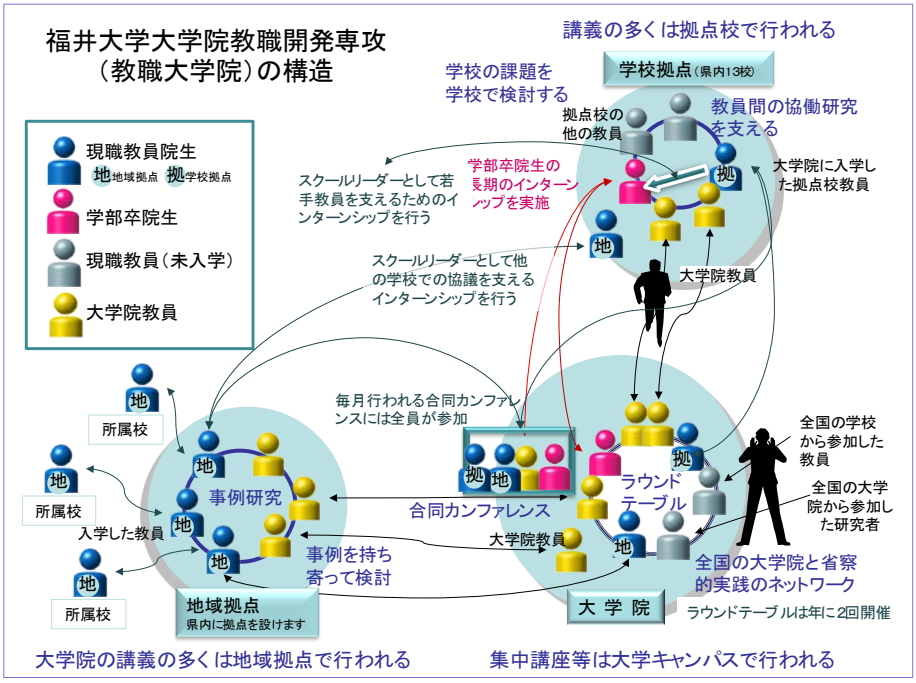
教育実習改革推進のための“先進モデル開発”と“実践的 FD 大学間コラボレーション”



1　取組について

（1）取組の全体の概要

知識基盤社会に生きる力を培う新しい学びと学校をどう実現していくか。教職専門職としての教師の高度の実践力・改革能力が問われている。そして，そのための実践的なカリキュラムの実現が教育系学部・大学院，とりわけ教職大学院の最重要課題となっている。実践研究と有機的に結びついた「学校における実習」の充実はその中軸をなす。本研究は長期教育実習の先進モデルの実現と，教育実習改革大学間コラボレーションの組織を通して，高度専門職としての生涯にわたる教師の実践力形成を支えるカリキュラムと組織の実現を目指すものである。中軸となる長期実習は若い世代の教員のための長期インターンシップと，現職教員のスクールリーダー実習から構成されている。



1）長期実習の２つの基軸

①若い世代の総合的実践力を形成する長期インターンシップ（学部卒院生のための実習）

多様な子どもとの長期的なかかわり，学級集団を作り支える仕事，親や地域社会との協力関係の構築。従

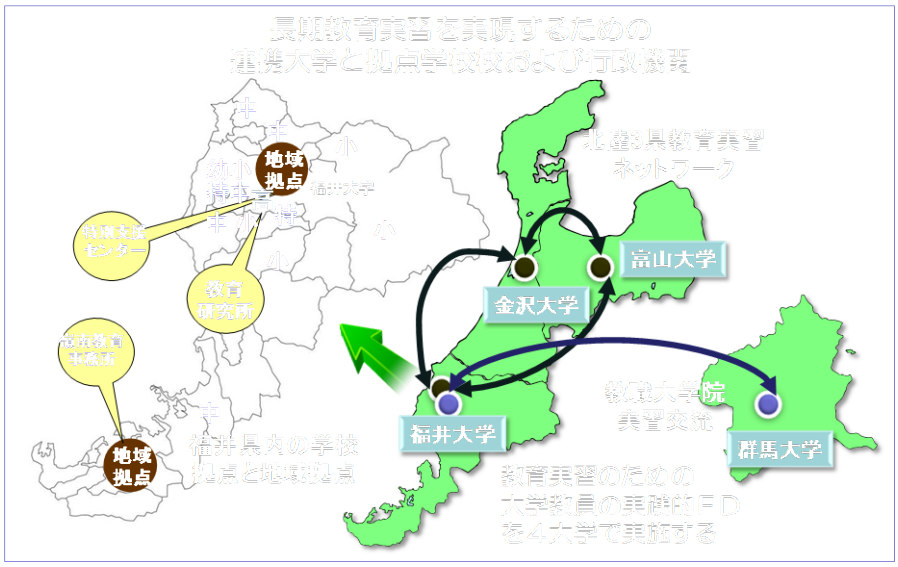
来の短期実習では学び難いこうした課題に直面し，困惑する若い教員が増えてきている。多様で複雑な教員の仕事について，先輩や大学教員の支援を得ながら長期にわたり総合的に実習していくシステムが必要不可欠となってきている。本取組では，拠点学校と大学が協定を結び協働体制をつくり，学部卒大学院生の１年間の長期インターンシップ（10 単位）を実現する。週３日間の学校での実習と，２日間の大学院での研究を継続的・往還的に進めることにより，自身の実践経験を省察検討し，次の実践に生かし発展させていくサイクルを実現し，総合的な実践力及び省察的実践者としての力量を培っていく。なお，大学院の講義は，実習と関連付けながら拠点学校と大学で行われている。

②現職世代の学校改革の実践力を培うスクールリーダー実習（現職教員院生のための実習）

一方，現職の教員は，今，21 世紀の知識基盤社会に生きる力を培う学校，それにふさわしい闊達な学習を実現するという困難な課題に直面している。現にある学校とそこでの学習を，新しい時代にふさわしく改革していくために，スクールリーダーは，新しいビジョンを学ぶとともに，組織改革を進めるマネジメントの力量，そして，教師の協働（同僚性）を支える実践力が不可欠となる。こうした実践力は従来の短期研修や，個人が学校を離れて学ぶ大学院では培うことが難しかった。本取組では，中核教員が学校を離れることなく，実践的なテーマを持って大学院に学ぶ体制を作る。自校において同僚と協力しつつ実践を進め，その展開を大学院で精査検討し，それを自校での実践に生かしていく実践と省察のサイクルを実現し，これに基づく実習を進め，スクールリーダーとしての組織能力・実践力を培う。

２）実習改革推進のための実践的ＦＤと大学間コラボレーション

教師教育改革は，個々の大学の実践と省察の積み重ねを通して開発されるべきであるが，同時にそれらを結び共有し合い，大学間の協働をより広く実現していくことが重要である。しかし，そのためには従来の協議会や研究交流だけでは不十分である。より踏み込んだ改革的な実践とその組織化の方法について，大学を超えて多くの大学教員が共有する実践的なＦＤを実現していくことが必要であろう。本取組では他大学の実習とその改革の取組に定期的長期的に関わり，協働して実践し研究協議を重ねる実践的ＦＤ，一種の大学教員のための教育実習を組織していく。



この協働の取組を通して，教員養成カリキュラム，とりわけ教育実習の相互的な検証・評価を進めていく。

①各大学の取組　各大学では以下の実習改革と地域の学校との連携協力の取組を進める。

●教職大学院における長期実習（10 単位）への取組（福井大学・群馬大学）

●学部段階における教育実習改革の取組（富山大学：堀川小学校を拠点とする単元開発を中心に据えた教育実習改革，金沢大学：WEB 教育実習ノート利用した実習生支援の取組，福井大学：Ｅポートフォリオを活用した４年間継続する教育実習の取組）

●学校と大学との連携協力体制づくりの取組（４大学でテレビ会議システムの活用）

②協働の実践的ＦＤと協働研究　これらの取組を交流し教育実習改革を協働で進めていくために以下の取組を進める。

〇大学における実習担当者のＦＤのための「実習−研究」の組織化（大学教員の教育実習）

関係大学，及びより広く教育実習に携わる大学教員の参加を得て，実践的な力量を高め合うために，互いの大学の教育実習に実際に参画し，教育実習の運営・組織・評価にかかわる実践と研究を進める。

〇教育実習における実践力形成の評価にかかわる共同研究（全大学）

各大学での取組とＦＤのための「実習・研究」の取組を踏まえつつ，教育実習における実践力形成のプロセスを検討し，評価する共同研究を進める。

6/28-6/29　実践研究福井ラウンドテーブル

2008 年 6 月 28 日，29 日の 2 日間にわたり，「日本の教師教育改革のための福井会議 2008・協働の教育実践と教師の力量形成／実践研究福井ラウンドテーブル 2008」が開催された。

１日目の初めのセッションでは，公開シンポジウム「地域－学校－大学の協働と教師の力量形成」として，宇都宮大学，都留文科大学，福井大学教職大学院の３つの取組が報告された。続いて，福井大学教職大学院における学校拠点の協働研究の展開について，拠点校である附属中学校での取組と，ストレートマスター（学部を卒業したばかりの院生）の長期インターンシップについて報告があった。その後，参加した大学関係者や大学院生が少人数のセッションでそれぞれの協働研究の展開と現状を紹介し合った。福井大学教職大学院生にとっても，他大学の教員と一緒に現状と課題，希望などを語り合う場となった。

2 日目のラウンドテーブルでは，20 に及ぶ５～６名の小グループで，多くの実践が語られた。教職大学院のリーダー院生にとっては，長期にわたる自分の実践を語る初めての場となった。その後，教職大学院のスタッフと，全日程に参加した慶応大学の鹿毛雅治教授による，小さな研究会が行われた。1 日目に話し合った，地域－学校－大学の協働ということについて，また，教職大学院の大きな柱となる，実践を語るということにおいて, 大学のスタッフがすべきことは何か, 2 日間を振り返っての議論となった。

夏の集中講座

集中講座
Cycles
2008
Summer

専門職としての教師の力量形成のためのコミュニティ

For Professional Learning Communities

実践の事例研究・架橋理論・自身の前期の実践の展開の跡付けを含む 12 の科目群が集中して進められる夏のサイクル。7 月下旬から 8 月下旬にかけて 3 サイクル 6 期間で進められました。今年度は期間中に協力教員の皆さんの特別ゼミも開かれました。

3 日間×3 サイクル，集中的に取り組んだ成果は，総ページ数 1000 頁近い全レポート集にまとめられています。事例研究・架橋理論の検討，そして実践の省察を，後期の学校での実践，そして長期実践報告に生かしていきたいと思います。

教職免許更新制講習の試行始まる

生涯にわたって学び合う教師のコミュニティを支える

寺岡英男

0　予備講習―受講者の感想から

「今回のようなチームで問題解決していくという協働形式も初めてであった。とまどいもあったが，だんだん慣れ，お互いにアドバイスし合ったり，意見交換し合ったりと，年代や校種や職種を超えて視野を広め，考えを深めることができたと思う。若い世代の人が悩んでいることについても，上の世代の人の経験から教えてあげられることもあり，良い勉強会になったと思う。２回違ったグループで報告会をしたが，違うテーマの人に思いを伝えることの難しさや，思いをくみ取ることの難しさを感じた。これまで，一年一年を振り返り実践記録を作るということは誰もが経験してきている。しかし，教員生活 30 年間の歩みを振り返ることは初めてで，改めてじっくりゆっくり自分の実践を顧みることができとても良かったと思う。毎日毎日追われる生活に慣れている自分に気付かされたことも良かった。この５日間は，喧噪を忘れじっくり自分を見つめられた良い機会だったと思う。しかも，５日間，担当教員が付いてくださり，たくさんの御助言をいただけたこともありがたかった。」

福井大学で夏休み５日間行われた予備講習には 57 名の教員が受講した。これは，50 歳代の小学校の女性教員の感想であるが，これまでの実践を振り返ること，学校種を超えた小グループで話し合うことという福井の講習の特徴的なものへの評価は高いものがあった。

１　免許更新制の導入の問題と大学の役割

（１）免許更新制の問題と問われる講習の方法

免許更新制については，平成 14 年答申「今後の教員免許制度の在り方について」の中で，教員の適格性確保を第一義とする新たな制度の可能性として提案されたが，その答申でも「なお慎重にならざるを得ない」との結論に至った経緯もあり，平成 18 年答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」で改めて更新制が提起された際は，「その時々で求められる教員として必要な資質能力が保持されるよう，定期的に必要な刷新（リニューアル）を図るための制度」と意味付け直されたという経緯がある。

その 18 年答申では，知識基盤社会の到来などの背景の中で，社会構造の大きな変革期を迎え，人材の質がその有り様を大きく左右する社会になってきていること，その中で教育の質が一層重要となっていること，そして教員についても，社会の大きな変動に対応し，求められる資質能力を確実に身に付けることの重要性が高まっている，との言及がなれている。大学は，更新制をこの面から意味付け，役割を考えなければならないだろう。

他方で，更新制の基本的な問題点（①受講者・開設者双方の負担―大学側から言えば，これまでとは一桁違う規模の受講者の受け入れへの対応，②国の方からの財政的補助はなく，受講料で工面する諸経費や事務等の問題，③30 時間という枠の中であげられる効果―特に共通 12 時間とそこで扱う４つの事項の縛り）を考えると，この制度と限られた時間の中で，教員として必要な資質能力の向上を目指すことは極めて難しい課題である。それだけに大学には，更新制講習をデザインする際の，視点と方法が問われることになる。

（２）大学の新たな役割として講習をとらえる視点

福井大学では，この更新制を，この間に取り組んできた教師教育改革の一環として，新たなミッションとして，位置付けなければならないと考えている。この間の取組の契機になったのは，2000 年に設置された「国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会」である。翌年の報告書では，各都道府県に置かれている「教員養成系大学・学部」を，県域を越えて「再編・統合」する方向が打ち出された。私たちは，その方向は，地域に根ざし地域の教育改革を支える実践的な教育系学部・大学院を実現し，それを開かれたネットワークの中で生かしていく 21 世紀の教師教育，そして教育改革全体のあるべき方向性を妨げるも

のと反対するとともに，新たな改革の方向性を，３度にわたる学部見解で表明した。同時に，学部・大学院での教師教育改革に取り組んできたが，その中心は，学校拠点に教師の力量形成と学校改革とを実現する夜間主・学校改革実践研究コースの設置（2001 年度）と，それを発展させた教職大学院の設置（今年度）である。

そうした取組を踏まえ，更新講習をデザインするときの視点を考えてみると，次の視点が求められると言えよう。一つは，生涯にわたる高いレベルの教育を受ける機会の保障。二つは，養成と研修の機能分担という従来の枠組みの見直しと大学の新たな役割。三つ目は，高度な専門的職業にふさわしい資質能力の向上という場合のその中味のとらえ直し，である。

生涯学習と高等教育

1990 年代末の「ユネスコ高等教育世界宣言」（1998.10）やケルン・サミットで採択された「ケルン憲章―生涯学習の目的と希望―」（1999.7）に代表される 21 世紀に向けての教育改革案に共有されるのは，生涯にわたって，より質の高い学習の機会をすべての人に保障することが，次の時代の社会のための最重要課題，不可欠な基礎条件であるという認識である。その実現のためには，「学校教育の改革と開かれた高等教育の実現はそのための不可欠な条件であり，大学における教師教育改革は両者をつなぐ重要な環をなしている」。夜間主・学校改革実践研究コースや教職大学院での取組は，そうした課題にこたえようとするものであるが，今回の更新制についても，教師を対象に，より質の高い学習の機会を生涯にわたって保障する学習機関としての大学の役割として受け止めなければならない。

養成と研修の機能分担の見直し

これまで教師教育は，「教員養成」と「研修」に分けとらえられてきた。大学での「教員養成」は，学生の教職準備教育であり，学校や行政での「研修」は採用後の現職教育であるとして。大学では「学問」「研究」を行うとする伝統的な職業観・大学観とそれによる両者の分断は，結果的に，実践と研修を精緻な省察・研究組織を欠いたものに止め，また大学における「研究」を，実践を変える実効性を問わないものに止める枠として作用してきた。

そうした研修を，教師の専門的な力量形成の場として，実効性のある，質の高いものとしていくためには，現職の教師が直面している課題を共有し，それを打開していく展望を持ち，そのための学習と研究を組織する視点と方法が求められる。そのためには，養成と研修の棲み分け，理論と実践の分断という関係を改め，学校・行政・大学とが協働する教師教育の取組が必要である。教職大学院はそれを目指す新たな枠組みだが，更新制もまた，同じ課題を持つものと位置付けられなければならない。

２　学習の転換と教師の専門性形成の課題

高度な専門的職業にふさわしい資質能力をどうとらえ直すかという視点については，「福井大学教職大学院設置の趣旨」の関係する部分を引用しておきたい。

21世紀の知識基盤社会に生きる知的な力を培う学習

21世紀の知識基盤社会に生きる力（リテラシー）を培う教育をどのように実現していくのか。新しい課題に対する問題解決能力，研究開発能力，多文化状況の中でのコミュニケーション能力，協働活動とそのコミュニティを活性化させていくマネジメントと自治の能力。21世紀の社会において求められるこうした力は，定型的な操作の反復と知識習得を中心としたこれまでの学習によっては培うことが難しい。各国の教育改革の中でそうした力を培う教育の実現に向けての模索が続けられている。

探究とコミュニケーションを支える教師の役割

…（これからの）学習においては，教師の役割は，…学習者が問題に立ち向かい，協働の探究活動とコミュニケーションを進めていく活動を促し支える役割，協働探究のファシリテーター・コーディネーターとしての役割が重要となってくる。そのためには，教師自身が探究しコミュニケーションし，また同僚と協働して活動を進めていく経験を重ねながら学び続けていくことが求められる。教師教育改革において教師の生涯にわたる学習と学校における同僚との協働研究が重視されているのはこのためである。

４つの次元の教職専門性の開発が求められる

（１）学習と成長を支えるファシリテーター・コーディネーターとしての実践力
（２）学習の協働組織とその改革のマネジメント力
（３）実践の質を不断に高め発展させていく省察・研究能力
（４）公教育としての学校を担う専門職として教員の理念と責任

３　福井大学の講習のデザインとその実践

（１）講習のねらいと構成

福井大学の更新講習（共通部分）は，「実践の省察を通して，公教育の未来を展望する」ことをねらいとしている。これは来年度からの本講習にも継承される。

予備講習では，①実践の経験を伝え合い・考え合う，②実践の展開を掘り下げ，意味を探る，③自身の歩みを確かめ，展望を開く，④主題に即して探究を深める，⑤探究の歩みを報告書としてまとめ共有する，の連続する５講座（各１日）を開設し，受講者はすべてを受講した。①～③が予備講習の共通内容，④⑤は３つの主題（授業づくりとカリキュラム／児童生徒の成長を支える／コミュニティとしての学校）を選択し探究を進める。各講座とも，少人数のグループでじっくり互いの実践を語り合い，聴き取りながら，主題を掘り下げ，新しい時代の教育の在り方を探究していく，新しい研修の形を目指した。共通課題の限られた時間と受講者の規模を考えると，多人数伝達型になりがちである。しかし，先ほどの学習の転換と教師の専門性を考えれば，協働の探究活動とコミュニケーションを進めていく活動を促し支える役割を教師に求める講習を，多人数伝達型で行うならば，自己矛盾と言うか，「滑稽なもの」に陥る。私たちは 57 名の受講者を４～５人の小グループに編成し，元校長の方など 15 名の学外からの応援と大学教員スタッフを合わせ，各グループにアドバイザーを配置し，問題の解決を図った。

（２）講習の実践

オリエンテーション　講習の１週間前にオリエンテーションを行い，講習の意義と福井大学の講習の構成と進め方を説明した。また，アドバイザーをお願いする元校長の方々にも事前説明を行った。

第１日〈実践の経験を伝え合う・聴き合う〉　まず１時間ほど小グループのチームに分かれ（このチームが５日間のホームとなる。各自選択した３つの主題ごとに小グループを編成），自己紹介の中で，自分が取組んできた実践を伝え合い，聴き合う。次に 40 分ずつの講義を行う（①「多様なニーズを持った子どもたちの成長を支える」，②「学校を巡る諸関係と危機のマネジメント」）。さらに，講義で「実践の展開を跡付ける視点と方法」にふれた後，用意された実践記録の事例から，興味・関心のあるものを選び，それを読み（事例研究），チームで紹介し合う。

第２日〈実践の展開を掘り下げ，意味を探る〉　講義③「公教育改革の展望と学習の転換」の後，チームでアドバイスし合いながら，個々に事例の検討をレポートにまとめる。チームを解いて新たに作った小グループでその事例検討報告会を行う。再びチームに戻り，報告会の様子を紹介し合い，２日間の評価を行う。

第３日〈自身の歩みを確かめ　展望を開く〉

講義「教育実践の記録：その意義・方法・組織」を学び，実践の歩みを記録する意味を理解する。次にチームで相談し合いながら，自身の実践経験を跡付け直す。最後に講義①③の補足説明を行った後，これまでのポートフォリオを整理し，この日の評価を行う。

第４日〈主題に即して探究を深める〉

以下の３つのアプローチから，一つないし二つを選択する。（①３日目にまとめた自身の実践記録をもとに，さらに十全な実践記録を作成する，②最初の２日間にまとめた事例研究を踏まえて，他の事例について更に比較検討する，③主題にかかわる理論的な背景について研究を進める）進め方はチームと個人で探究し，最後にチームで紹介し合う。

第５日〈探究の歩みを報告書としてまとめ共有する〉

４日目の続きに取り組み，午前中までに各自報告書としてまとめ，午後は新たな小グループでそれぞれ報告を行う。その後チームで報告を共有し，ポートフォリオを整理し，２日間の評価を行う。

４　今後の課題.

今回の予備講習では，少人数のグループで互いの実践を語り合い，聴き取りながら，主題を掘り下げ，探究する新しい研修の形を目指した。これについては冒頭の受講者の感想のように，多くの受講者から良い評価を得た。元校長など応援いただいた方々からも，良い方法だと評価が高かった。来年度からこの方法でやれる見通しが持てたが，一方で，教員として必要な資質能力を培うには，もう少しゆとりのある時間が必要である。それは，更新制という枠に止まらず，10 年研修や教職大学院等とのかかわりの中で，より質の高い学習の機会を生涯にわたってどう保障するかという基本的な検討を迫るものである。

〈参考文献〉

福井大学教育地域科学部教授会見解「21 世紀における日本の教師教育改革のデザインー地域の教育改革を支えるネットワークと協働のセンター」2002.3

福井大学教職大学院「学び合う共同体としての学校をつくるために」（改訂版）2008

福井大学更新講習予備講習テキスト「教師の実践力のための５つのアプローチ」2008

実践研究/交流報告

カリフォルニア大学サンディエゴ校で開催された International Society for Cultural and Activity Research，東京学芸大学での日本教育心理学会，EU そしてスウェーデンでの教員養成課程改革を探る調査研究。世界の，そして日本の教育実践研究と教師教育改革の動向にかかわる，岸野さんと石井バークマンさんからのレポートです。

国際学会参加報告：ＩＳＣＡＲ第２回大会での学び

岸野麻衣

９月９～13 日にわたって，カリフォルニア大学サンディエゴ校で開催された，International Society for Cultural and Activity Research（ISCAR）の第 2 回大会に参加してきました。この学会には，子どもや教師の発達と教育を様々な活動の中で検討し，社会・文化・歴史的なものとして考えていこうとする研究者が集まっています。夏の集中講座サイクル２の課題図書の一つにもなっていた「状況に埋め込まれた学習」の著者ジーン・レイブや，「拡張による学習」の著者ユーリア・エンゲストロームも会員の一人です。学会では，講演やシンポジウム，ポスターセッションなど本当に様々なセッションがありました。その中から，私がどんなことを学んできたのか，少し紹介したいと思います。

＜セッションから学ぶ＞

ＵＣＳＤ構内のクマの石像

私は，子どもの遊び，教室での学習過程，教師教育などのセッションを中心に参加しました。特にここでは教職大学院とも関連の深い，教師教育のセッションを紹介します。イギリスやオランダの教師教育の実践報告では，教師に，真に意味のある学びについて考えてもらい，学習観の転換を図り，教師自身の省察を促そうとしたものの，なかなか理解してもらえず試行錯誤しているという報告や，学校をベースに行った教師教育の実践において，そこに暗黙に持ち込まれていた道具やルール，分業やコミュニティの在り方を分析した報告がありました。「福井大学の方が進んでいる！」という印象を受け，次回は福井大学教職大学院の取組をぜひ報告したいと思いました。

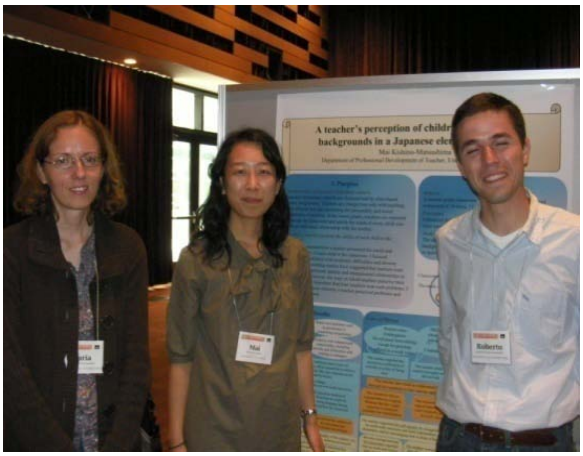
講演のひとコマ

＜発表で学ぶ＞

私自身は，ポスターセッションで発表しました。数年前に東京のある公立小学校で１年間学級観察をしていた結果について，再分析したものを報告しました。観察では，できる限り放課後に振り返りの時間を設けていたので，今回はそこでの教師の語りを分析しました。特に，学習面で個別に支援の必要な子ども３名についての語りに焦点を当てました。教師が子どもにかかわりながら対応を見いだしていき，その対応にいつも子どもの自己，クラスメートとの関係，保護者の様子の３つが反映されていく過程を，具体的なデータを基に示しました。「診断のことば」ではなく「教師自身のことば」で子どもを語り，「子どもの問題」として終わらずに「クラスや家庭の問題」としても理解し，対応に生かしていく意味を報告しました。ポスターを見に来てくれた方からは，語りについての他の解釈や，観察された教師の行為と語りとの関連や観察者の教師へのかかわりなどについてコメントをいただき，とても有意義な時間となりました。

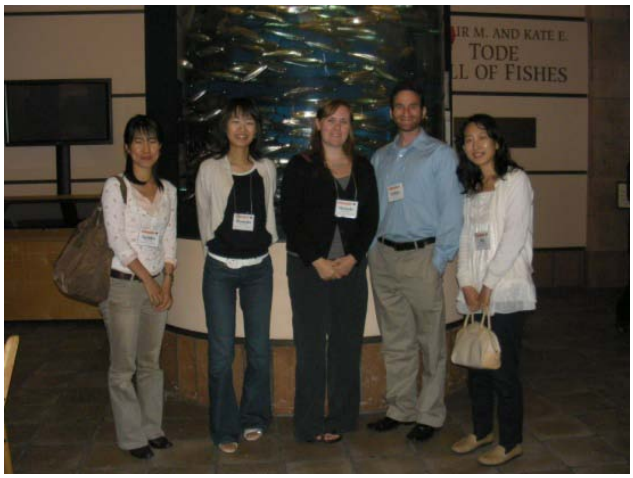
＜出会いと再会に学ぶ＞

この学会は３年ごとに開催されています。３年前の第１回大会はスペインのセビリアで行われ，院生だった私は，初めての国際学会にドキドキしながら参加したものです。



ポスターの前にて

当時，学会には“Student Meeting”という，各国の院生が集まって意見交換をする交流の機会が企画されていました。せっかくだから…と行ってみると，アメリカ人の院生数名と友達になることができました。その後の３年間は，余り交流なくバタバタと過ごしてしまったのですが，なんと今回，彼らに再会することができました。今ではお互いに博士号を取得して大学に勤めており，自分の研究のことや今の職場の話，プライベートの話など，３年前以上に真剣に意見交換ができ，とても刺激になりました。世界のどこかで同じようなアプローチで研究を進め，自分以上に頑張っている人たちがいると思うと，本当に励まされます。３年後の第３回大会はイタリアのローマでの再会を約束して帰ってきました。



水族館でのレセプションにて

教職大学院に心理学者はどう関わるか

日本教育心理学会第 50 回大会

岸野麻衣

10 月 11～13 日，東京学芸大学において日本教育心理学会第 50 回大会が行われました。この学会は心理系の学会では比較的大きな学会で，教育心理学の研究者だけでなく，学校現場で実践をしている教員の方も多く参加しています。私は今回，松木健一先生と一緒に２つの自主シンポジウムを企画して司会や話題提供を務め，他大学の研究仲間と一緒に１つの自主シンポジウムで話題提供を行ってきました。

企画したうちの１つは，「教職大学院に心理学者はどう関わるか」というシンポジウムです。松木先生が企画の趣旨説明と司会を担当し，宮城教育大学教職大学院の西林克彦先生，兵庫教育大学教職大学院の吉田寿夫先生に各自の実践を紹介いただき，福井大学教職大学院の取組は私から紹介させていただきました。西林先生は，教育心理学者は「教え学ぶ過程」を研究してきているのだから，教科専門・教科教育の教員と協働してその専門性を発揮すべきだということを，具体例を交えてお話されました。吉田先生は，院生たちが現象をクリティカルに吟味して思考していけるよう，様々に工夫して講義を行っているということを，具体的な講義の内容を基にお話されました。福井大学の取組については，院生の学校をベースに実践研究を行い，大学でのカンファレンスや集中講座を通して，実践・省察・再構築のサイクルを促していることや，授業研究を通して子どもの成長発達を支援すると同時に，教師自身の成長発達も支援しようとしていることを話しました。

最後に，コメンテーターをお願いした有元典文先生（横浜国立大学）からは，教職大学院で学ぶことによってどんな力を身に付けるのかという問いをいただき，無藤隆先生（白梅学園大学）からは，３名の実践を総括しつつ，教職大学院に求められることとして，様々な指導法を教える場ではなく，教師が自ら指導法を開発する力を身に付けられるようにすることや，授業という複雑なプロセスを丁寧に見て多様な見方ができるようにすることの必要性を御指摘いただきました。

シンポジウムを通して，今後の教科専門・教科教育との連携の在り方や教職大学院の院生にどんな力を付けていくべきなのか，改めて考えさせられ，現場からもスタッフからも共に学びながら私自身も様々な面で力量を付けていかなくては，と改めて思いました。

新しい教師たちに，もっと実習・実践を Mer praktik för nya lärare

ースウェーデンの大学における教員養成課程改革と福井大学教職大学院の理念についてー

石井バークマン麻子

この 9 月初旬から中旬にかけて，スウェーデンに研究調査に赴いた。調査の目的は，同国で進行中の教員養成課程改革の特色を，ボローニャ・プロセスとの関連から明らかにすることであり，今回はその第 1 段階の調査であった。ちなみにボローニャ・プロセスとは，EU 諸国を中心に計 46 か国（2008 年 9 月現在）が 2010 年までに「欧州高等教育圏（European Higher Education Area）」の完成を目指す高等教育制度改革であり，北欧ではアイスランド，スウェーデン，デンマーク，ノルウェー，フィンランドの 5 か国すべてがこれに加わっている。ボローニャ・プロセスについては本稿の主題ではないので，関心ある方々には「EU 諸国のボローニャ・プロセスと複合文化社会における教員養成課程改革（1）」（石井バークマン麻子・湊七雄・中澤達哉共著，福井大学教育地域科学部紀要　第Ⅳ部　教育科学第 63 号．2007）をお読みいただきたい。

さて，今回の調査で訪れた国立ストックホルム大学（詳しくは同大学に統合された国立ストックホルム教育大学）では，教員養成課程が大きく改編しつつあった。スウェーデンの大学等高等教育機関のすべては，ボローニャ・プロセスの進行状況および参加各国と足並みを合わせながら，いくつもの改革を進めている。教員養成課程改革はその中でも特に複雑で，改革の努力を要求されるとみなされる分野である。加えて，国立ストックホルム教育大学は国立ストックホルム大学に統合された直後であるため，大学内の組織改革も併せて遂行する状況になった。

同大学の教員養成課程編成担当局の責任者にインタビューした際，私の仕事について質問された。そこで福井大学教職大学院の基本理念や特色，現状等を話すと，大きな関心を示し，多くの質問を受けた。特に，教職大学院担当教員の約半数は，教師としての経験のある実務家教員であることは，彼らには驚きであったようだ。何故ならば，スウェーデンにおけるここ数年間の教員養成系大学を標的としたディベートの中心は，研究における科学性の強化と研究者である教員の増加要求であったからだ。

国立ストックホルム大学の教員養成プログラム担当教員の何人かは，学部における「教育実習の充実」と「理論と実践の融合」を改革の 2 つの重要ポイントとして語った。福井大学教職大学院における教職専門性開発コースの若い院生たちは，週 3 日間の長期インターンシップを年間通して行っていること，さらに，スクールリーダーコースの院生がインターンのメンターとして相談役となり，若い教員を育てる実習が教育課程の中に位置付けられていることには，非常に興味をそそられた様子であった。

Asako Ishii-Barkman, professor i specialpedagogik vid universitetet i Fukui, är med och förändrar den japanska lärarutbildningen. Hon har tidigare bott i Sverige i 20 år och har just varit på återbesök för att studera utbildningen vid Stockholms universitet.
FOTO ANNA SIMONSSON

Mer praktik för nya lärare

Fler lärare som jobbat i skolan. Bättre kontakt med verkligheten. Den japanska lärarutbildningen är på väg att förändras.

– Det här är unikt i Japan, säger Asako Ishii-Barkman, professor i specialpedagogik vid universitetet i Fukui.

Krav på mer vetenskaplighet och fler forskande lärare har löpt som en röd tråd i debatten om lärarutbildningen här i Sverige. I Japan är nästan alla lärarutbildare forskare som disputerat i ämnet de undervisar i. Få har egen yrkeserfarenhet och undervisningen i didaktik är undermålig.

– I över hundra år har universiteten anställt lärarutbildare som forskat. Nu har man insett att lärarutbildningen behöver mer kontakt med verkligheten, säger Asako Ishii-Barkman.

De japanska lärarutbildningarna har börjat anställa lärare som både forskat i ett ämne och har jobbat som lärare i skolan. Lärarutbildningen har dessutom förlängts. Efter den fyraårigagrundutbildningen kan studenterna läsa till en tvåårig masterutbildning. Förhoppningen är att de flesta lärare ska göra det på sikt.

– Den kompetens studenterna får i lärarutbildningen räcker inte. I skolan har situationen för eleverna blivit mer komplex, deras behov är mer varierande, säger Asako Ishii-Barkman.

Hon var nyligen på Sverigebesök för att studera lärarutbildningen vid Stockholms universitet. Hon har bott i Sverige i 20 år och jobbat som specialpedagog, men flyttade för tre år sedan tillbaka till Japan.

I april antogs de första 34 studenterna på masterutbildningen, som Asako Ishii-Barkman jobbat med de senaste åren. I Hälften av lärarna på utbildningen kommer från skolans värld, de andra är ämnesteoretiker. Liknande utbildningar finns på många andra universitet. Men Fukui har kommit långt i flexiken att förena teori och praktik. Universitetet bedriver så kallad praxisnära forskning tillsammans med länet och lärarna på fältet. Många av Asako Ishii-Barkmans arbetskamrater är skeptiska, didaktik intresserar dem inte. Men pressen och andra universitet är desto mer intresserade.

– Vi vill bryta den passiva, kollektiva undervisningen där eleverna förväntas sitta i sina bänkar och lyssna i 45 minuter. Vi vill främja kreativiteten, säger Asako Ishii-Barkman.

Japanska lärarstudenter har bara några få veckors praktik på grundutbildningen. På påbyggnadsutbildningen i Fukui är studenterna ute i skolan tre dagar i veckan under ett år. De yngre studenterna kan ha en av de äldre som mentor, om den äldre är erfaren lärare och de praktiserar på samma skola.

– Att stödja nya lärare är en del av de äldre studenternas utbildning, säger Asako Ishii-Barkman.

Läraryrket har hög status och bra lön. Men det är svårt att få fasta jobb, många vikarierar. Det finns ett tryck på förändring. Barnafödandet har gått ned och söktrycket har minskat till mellan två och fyra per plats på lärarutbildningen.

Japanska elever ligger inte längre i topp i internationella studier. Mängfalden har ökat. Fler har utländsk bakgrund, även om det är få, och sex procent har diagnoser som inlärningssvårigheter, adhd och aspergers syndrom.

Den japanska skolan måste jobba mer med elevhälsa, och bli bättre på att inkludera eleverna, menar Asako Ishii-Barkman. Konkurrensen om att bli bäst är fortfarande påtaglig. Elever mår dåligt av det.

– Japan är ett konkurrenssamhälle. Det krävs något nytt som utmanar det.

/ERIKA WERMELING

SKOLVÄRLDEN NR 15 / OKTOBER 2008 13

スウェーデンの教育新聞"Skolvärlden" 15号（2008年10月2日発行）より抜粋

学部の教育実習の充実のために，ストックホルム市内の各区に大学の教員が出向き，教育局または学校教育課との話し合いを重ね，協力体制を築き，実習先としての「パートナースクール」を開拓していた。このパートナースクールは，機能の仕方と役割において，福井大学教職大学院の「拠点校あるいは協力校」と類似したものと思われた。

2008 年 8 月に，両大学の統合は実施された。国立ストックホルム大学には従来から人文学部，法学部，自然科学部，社会科学部の伝統ある 4 学部があり，新たに教員養成学部が 5 つ目の学部として傘下に入ったわけである。大学組織改革と並行して，教員養成プログラムへの 4 学部所属の教員（研究者）の参加の仕方は現在進行形の課題である。従来の専門分野に分かれた教員たちが全学的に，教員養成課程においてどのような協力体制を，どの範囲でどのように構築していくのか，その試行は始まったばかりである。

今回話をした教授たちの推薦で，帰国する 2 日前に，Skolvärlden （スクールワールドという意味）という教育新聞の記者のインタビューを受けた。写真は，2008 年 10 月 2 日発行の第 15 号に記載された記事である。タイトルは「新しい教師たちに，もっと実習・実践を」であり，福井大学を事例として，日本では異なった理念と方向で新たな教師教育が始まっていることが語られたのである。推薦者たちの意図は，スウェーデンの教員養成に関する議論に，新たな視点を投じることであったに違いない。

福井市豊小学校自主研究発表会

11/6（木）

共に学び合い，くらしに生かす子どもたち

～見通しをもち，学びを活用できる子をめざして～

会場 福井市豊小学校
〒918-8011 福井市月見３丁目９－１
TEL 0776-36-3802 FAX 0776-36-3803
E-mail minor-e@fukui-city.ed.jp
http://www.fukui-city.ed.jp/minori-e/
日程 13:00-16:30

丸岡南中学校自主研究発表会

学びやすい環境の創造

－喜びが感じられる授業をめざして－

11/7（金）

会場 福井県坂井市立丸岡南中学校
〒910-0355 福井県坂井市丸岡町高瀬 15-2
http://www.maruokaminami-j.ed.jp/
日程 13:00-16:45

福井大学教育地域科学部附属特別支援学校公開研究会

11/19（木）

自分らしく生きる学びの創造

会場 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校
〒910-0066 福井市八ツ島町1-3
TEL 0776-22-6781 Fax 0776-22-6776
E-mail yougo@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp
http://www.fukui-city.ed.jp/minori-e/
日程 12:30-16:40

福井新聞社提供
2008.10.25

2008年(平成20年)10月25日(土曜日)

公開研究会の授業で、自走式ロボットの動きを確かめる生徒たち＝24日、福井市至民中

生徒の主体的授業探る

教科センター市内初導入　至民中で公開研究会

福井市南江守町に本年度移転し「教科センター方式」の授業を導入した至民中で二十四日、公開研究会が開かれた。県内の中学教諭らが、開放的な教室で生徒自ら考える「問題解決型」の授業を見学し、今後の教育の在り方を考えた。

「教科センター方式」は生徒が授業ごとに教室を移動する同市初の取り組み。教室と廊下の間仕切りが極力省かれた校舎や、学習の深まりを重視した七十分授業体制などが全国から注目を集めている。

公開研究会には県内外の教諭や教諭志望の福井大学生、市教委関係者ら約四百五十人が参加。五教科の授業に分かれて見学した。

技術科の授業は教室脇のオープンスペースを利用して開かれ、自走式ロボットのプログラミングに挑戦。生徒はグループに分かれ、決められたコースを動かすための方法を話し合いで見つけていった。英語や数学の授業は発表中心で進められ、生徒と教師が自由な雰囲気の中で意見を交わした。

参加者たちは授業中の生徒の言動や考え方の推移を観察。従来の詰め込み型ではなく、生徒が主体的に学習意欲を高めていくための指導方法を探った。

この後の全体会では、新制度導入の効果が説明され、渡辺本爾市教育長ら三人が公開対談。分科会でこの日の授業を題材にした討論を行った。

児童が車いす体験　思いやりの心学ぶ

旭小で福祉授業

福井市の旭小で二十四日、車いすで生活する障害者の苦労などを体験する授業が開かれた。参加した四年生四十六人が歩道での車いす試乗や車いすバスケットボールなどに挑戦。困っている人に手を差し伸べる思いやりの心を学んだ＝写真。

福祉を総合学習のテーマにしている四年生を対象に旭地区社協が毎年開いている。今年は坂井市

二〇〇四年から続いている福井市東藤島地区と島根県安来市荒島地区との交流が、両地区にある古墳群を縁に深まっている。荒島地区の古墳群を研究している島根大の教授が、

[編集後記]

後期最初の教職大学院 Newsletter 第6号をようやく発行することができました。7号以降，刻々と進む実践と研究に遅れずに編集・発行していけたらと思います。どうかよろしくお願いいたします。

（柳澤昌一）

教職大学院 Newsletter　No.6　β
2008.10.30 発行
2008.10.30 印刷

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507　福井市文京 3-9-1　dpdtfukui@yahoo.co.jp